

## 熊本大学学術リポジトリ

### Kumamoto University Repository System

Title	朱樂（ザボン）：詩歌
Author(s)	三四郎
Citation	龍南會雜誌， 1 5 2： 9 0 - 9 1
Issue date	1913-11-05
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/6293">http://hdl.handle.net/2298/6293</a>
Right	

暗黒の冷たき底へ、  
只ひとり急ぎゆく、急ぎゆく、

その俤をしのび音に、  
ほろほろと

雛は古巢に  
泣きつかれ、心亂れぬ。

一とせは、夢の空のごと  
あだなれや、

今かへる菊月の  
六日の朝、

紫雲は空に廣これど  
山邊の旭力なく、

只蟲の音にことよする

月の夕べは悲しびにみつ。

ああ深更、空に流るゝ星の光よ、  
音すこく木の葉を叩く時雨よ、  
散り敷ける紅葉、

紅葉を染むる血潮の色よ、

淋しき室に漂ふ蟲の聲、時計の音、油のにじみ、  
寂莫をやぶる凡ての響よ、  
すゝりなく我等が心を、  
そも如何にして慰めんとするか。

追悼、二年祭の日、九月廿二日稿

朱

變

三四郎

あわかなるをどめの頬の  
大理石の白きほてりに  
ぼつくりと揺ぐざばんの  
黄金なす葉蔭の外光。

晩秋の日光の放射、  
漂へる蝶のもろ羽の  
うつゝなき撮み心よ！  
果をちぎる刹那の吐息。

ちや、めらの部落行く匂ひ、  
目籠の頼のかすく  
手まさぐる若きかひなに  
やるせなき柔毛の震慄。

空かほる潮の遠鳴り、  
瑠璃色の沖走る帆は  
おらんだかはたほるとがる  
見る目憂きざぼんの烟。

さん、たまりや、をどめは謠ふ  
混血の舌の震音、  
祖先を故國を想ふか  
優雅に鬱憂に。

あゝざぼん、芳烈の香に  
噎び泣く俚謠の色彩、  
うち、震ふその唇に  
はにかみの甘き接吻。

## あ　　ぢ　　き　　な　　さ

——Xの君へ——

葉

暫らくの別れのきはに猶もわが云ひ得ぬ心あぢきなきかな  
踏み越えし七重の山をかへり見て淡き誇に街に入りたる  
幸ありと思ひし夢のさめしころ世にはなれたる心ちするかな  
夜汽車待つ山の小さき停車場にわれをめぐりてこほろぎの鳴く  
葉鶏頭薬園町の杉垣のあひより見えて秋晴るゝかな